

國學院大學學術情報リポジトリ

『古事記』における「稲」の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 胡, 暁媛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001565

『古事記』における「稲」の研究

A Study on Rice in the *Kojiki*

胡 曉 媛

キーワード：『古事記』 稲 祭祀 王権 古代国家

关键词：『古事記』 稲 祭祀 王権 古代国家

要 旨

昔から、日本人は「稲」に対して特殊な感情を持っている。「稲」は日本の国家と民族の元、日本文化の元と言っても過言ではない。「稲」が日本人の身体を支える柱であれば、「稲」の文化は日本人の精神世界を支える源泉と喩えることができるだろう。

日本人は稲を神化し、神としての色彩を与える。日本最古の歴史書『古事記』において、稲の起源や崇拝や祭祀などに関する神話が多い。これらの「稲」神話の多くは、また祭祀や王権や日本古代国家などのような政治的要素と密接な関係があり、濃厚な政治的色彩が現われている。

小論は『古事記』の「稲」を研究対象にすることにした。まず、テキストにおける稲関連語彙を検索し、各語の分析を行った。それから、重点的に「稲」と日本の祭祀活動、王権および日本古代国家との関係を論じた。

古代日本人にとって、「稲」は生存するための糧だけでなく、また正統性と権威の象徴でもある。『古事記』における「稲」に対する研究を通じ、古代日本人の「稲」に対する信仰、また「稲」の文化の起源と発展を理解できると考える。更には、『古事記』神話の下に隠れる政治性を窺い知ることができる。

摘要

自古以来，日本人对“稻”就怀有特殊的情感。可以说“稻”是日本这个国家和民族的根，是日本文化的根。如果说稻米筑成了日本人的躯体，那么稻文化就是日本人精神世界的源泉。

日本人将“稻”神化，赋予其神的色彩。日本最古老的史书《古事记》中有诸多关于稻种起源，稻崇拜以及稻祭祀等的神话传说。而这些“稻”传说又大多与祭祀、王权以及古代日本国家等政治要素息息相关，透露出浓郁的政治气息。

本研究以《古事记》中的“稻”为研究对象。首先对《古事记》文本中出现的“稻”相关词语进行检索，并逐一分析。之后再重点研究“稻”与日本的祭祀，王权以及古代日本国家之间的关系。

对古代日本人来说，“稻”不仅是赖以生存的食粮，也是正统和权威的象征。通过对《古事记》中的“稻”的研究，有利于了解日本古代的稻信仰以及稻文化的起源与发展，更能一窥《古事记》其神话外衣下所的政治属性。

1. はじめに

現在、全世界で半数を超える人口が米を主食とする。特に稲を豊富に産出する東アジア、例えば中国や日本やインドなどにおいて、稲は人間が生存する糧としてあり、人々の生活と密接な関係を持っている。

「稲」は日本の国家と民族の元、日本文化の元と言っても過言ではない。稲は日本人の身体、つまり生成を支える柱であり、「稲」の文化は日本人の精神世界を支える源泉に喩えることができる。従って、日本人の稲に対する信仰、また「稲」の文化の起源と発展、および日本の祭祀活動、王権、また古代国家との関係を解明するために、小論は「稲」を中心にし、『古事記』を研究対象とした。

先行研究の中で『古事記』に対する研究は「五穀」や「食物」などのような、穀物類全般の視点から研究することが多いが、その中で「稲」そのものについて論じたものは少ない。そのため、小論は『古事記』の「稲」にしばることにした。ミクロの視点からの用字と意味の解釈だけではなく、マクロの視点から「稲」と日本の祭祀活動、王権や日本古代国家との関係についても研究する。

さらに、『古事記』についての先行研究の中で「稲」を研究対象としたのは、その政治性に対する分析が不足しているうえ全面的ではない。そのため、小論では「稲」と「政治」を結び付け、重点的に『古事記』の中の「稲」が現われる政治性を研究することにした。

古代日本人にとって、「稲」は生存するための糧だけではなく、正統性と権威の象徴で、更には超人的な力を持つ信仰対象である。よって小論は、『古事記』の「稲」の考察を通じ、古代日本の「稲」に対する信仰、「稲」の文化の起源と発展を理解する。それにより、『古事記』神話の外見の下に隠れる政治性を窺い知ることが小論の目的である。

2. 『古事記』における「稲」の分類

古代日本人の稲に対する文化と信仰の歴史を究明することを目的として、本章では『古事記』における稲関連語彙を検索した。それから、以下3種類に区分した上で、各語の文化的意味あるいは歴史について述べる。

(1) 稲に関する氏姓

氏とは事実上あるいは系譜上、同祖から出たものとされる家の集団、すなわち氏族を指すものである。古代において支配階層の構成単位を成す。姓とは、古代の豪族が氏の下につけた称号である。古代日本において、諸豪族は個々の家を基礎とした同族的集団である氏を構成し、これに朝廷内での地位や職業に応じ、姓を与えられる。

日本においては、氏族が多くあるが、「稲」に関する氏族は少ない。『古事記』における氏姓に関する稲関連語彙を表1のように整理した。

表1 『古事記』における稲に関する氏姓

キーワード	キーセンテンス	記	ページ
蒲生稲寸	次、天津日子根命者、凡川内国造・額田部湯坐連……高市県主・ 蒲生稲寸 ・三枝部造等之祖也。	神代記	P62
稲木之別	次、大中津日子命者、山辺之別・三枝之別・ 稲木 之別・阿太之別……牟礼之別等祖也。	垂仁天皇記	P196
稲置	一子、孫者、伊賀須知之 稲置 ・那婆理之 稲置 ・三野之稲置之祖。	安寧天皇記	P166
	次、当芸志比古命者、血沼之別・多遲麻之竹別・葦井之 稲置 之祖。	懿德天皇記	P166
	自其余七十七王者、悉別賜国々之国造、亦、和氣及 稲置 ・県主也。	景行天皇記	P214

「蒲生稲寸」は『古事記』神代記の天照大御神と須佐之男命のうけいにより生まれた神のうち、天津日子根命を始祖とする12氏の1つである。稲寸は地方官職名で、稲置とも記し、村の世襲の首長の姓である⁽¹⁾。

「稲木之別」は垂仁天皇の皇子である大中津日子命を始祖とする10氏の1つである。

「稲置」は大化の改新以前の大和朝廷にあった地方行政単位を治める首長で、のちに姓化する。語義については、稲君説や稲霊招き説などがある。古文献にみえる稲置の分布は、畿内およびその周辺に多いが、皇室領の経営にあった倭王権の地方官職名とみる説と、国の下級組織とする県の官職名とみる説などが唱えられている。『日本書紀』の成務天皇5年(795)条には

(1) 池添博彦. 食物文化考：古事記神話と稲作文化. 帯広大谷短期大学紀要 25, 1988-03, P29.

五年秋九月、令諸国、以国郡立造長、県邑置稻置。⁽²⁾

という起源説明が記載されているが、その表現にはのちの知識にもとづく潤色があり、地方制度上の稻置の由来を成務天皇の代に仮託したものと考えられる。『隋書』東夷伝倭国条には

八十戸置一伊尼翼，如今里長也。⁽³⁾

と述べられており、この伊尼翼の翼は冀の誤りで、稻置とする説が有力である。天武天皇13年(684)の新しい八色の姓の制定に際しては、最下位の姓とされ、また他方では稻置代首・因支首のように氏名化するものもあった⁽⁴⁾。

(2) 稻に関する神名、人名

『古事記』から抽出する稲関連語彙の中で最も多いのは神名と人名である。

表2 『古事記』における稲に関する神名、人名

キーワード	キーセンテンス	記	ページ
稲田宮主	且、負名号 <u>稲田宮主</u> 須賀之八耳神。	神代記	P72
稲水命	娶其姨玉依毘売命、生御子名、五瀬命。次、 <u>稲水命</u> 。次、御毛沼命。	神代記	P136
	故、御毛沼命者、跳浪穗渡坐于常世国、 <u>稲水命</u> 者、為妣国而、入坐海原也。	神代記	P138
稲瀬毘古王	次、阿耶美都比売命者、嫁 <u>稲瀬毘古王</u> 。	垂仁天皇記	P196
稲依	又、息長宿禰王、娶河俣 <u>稲依</u> 毘売、生子、大多牟坂王。	開化天皇記	P180

(2) 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳。新編日本古典文学全集2—日本書紀1。小学館、1994年、第1版、P396。

(3) [唐]魏徵・令狐德棻撰。隋書第6冊。中华书局、1973年、第1版、巻81 列伝第46 東夷 倭国、P1826。

(4) 上田正昭。「いなぎ 稻置」条。国史大辞典編集委員会。国史大辞典 第1巻。吉川弘文館、1979年、P722。

稲依	又、娶近淡海之安国造之祖、意富多牟和氣之女、布多遲比売、生御子、 稲依別王 。	景行 天皇記	P236
	次、 稲依別王者 、犬上君・建部君等之祖。	景行 天皇記	P238
稲目宿禰	又、娶宗賀之 稲目宿禰 大臣之女、岐多斯比売、生御子、橘之豊日命。	欽明 天皇記	P376
	此天皇、娶 稲目宿禰 大臣之女、意富芸多志比売、生御子、多米王。	用明 天皇記	P382

「稲田宮主」については以下の伝説がある。須佐之男命が無事に大蛇を退治してから、櫛名田比売のために須賀の地に宮殿を建てる。須佐之男命は足名稚神を呼び寄せ、「あなたを私の宮の首に任ずる（汝者、任我宮之首）。」と言って、「稲田宮主須賀之八耳神」の名を与えた。つまり、稲田宮主は櫛名田比売の宮をつかさどる者である。

「稲水命」は『日本書紀』では「稲飯命」「彦稲飯命」と表記される。記紀によれば、「稲水命」は天津日高子波限建鷦葺草葺不合命と、海神の娘の玉依姫との間に生まれた第2子（第3子とも）で、初代神武天皇の兄である。

「稲瀬毘古王」については以下の伝説がある。『古事記』垂仁天皇条では皇女阿耶美都比売命が稲瀬毘古王に嫁いだ。稲瀬毘古王は垂仁天皇の女婿で、応神天皇や稚渟毛二俣命（継体天皇の先祖、息長氏族の祖）等の父である。

「稲依別王」は日本武尊の第1子として生まれ、母は布多遲比売である。犬上君、建部君の祖である。

「稲目宿禰」は蘇我稲目宿禰の略称である。蘇我稲目は古墳時代の豪族で、蘇我高麗の子、馬子の父であり、また、宣化・欽明朝の大臣でもある。その時代、蘇我氏は物部氏と並んで中央政治のカギを握る重要な人物であった。そして、彼の2人の女を欽明天皇に嫁がせたことにより、用明・崇峻・推古の三天皇の外祖父ともなった。

その事績としては、屯倉経営への優れた指導力の発揮があげられ、宣化天皇元年の那津の口官家の設置や、欽明天皇16年以降の吉備五郡の白猪屯倉、備前児島屯倉の設置・経営がある。後者では、耕作農民である田部の丁の名籍を造る新方式を導入し、また大和の大身狭・小身狭屯倉には、百済・高句麗からの渡来人を参加させ、さらに紀伊の海部屯倉を開くなど、朝鮮半島の情勢に対応した新施策がとられた。また、進んで仏教を受容し、大和の小墾田の家に仏像を安置し、

向原の家を寺とし、大陸の文化や思想への理解を示すなど、開明的姿勢を持ち、欽明朝末年までの政治に指導的役割を果たした。『日本書紀』によると、欽明天皇31年3月1日に没したという⁽⁵⁾。

(3) その他

『古事記』から抽出する他の稲関連語彙には地名や専門用語などの語もある。

表3 『古事記』における稲に関する他の統計

キーワード	キーセンテンス	記	ページ
稲種	故、所殺神於身生物者、於頭生蚕、於二目生 <u>稲種</u> 、於二耳生粟、於鼻生小豆、於陰生麦、於尻生大豆。	神代記	P68
稲羽	所以避者、其八十神、各有欲婚 <u>稲羽</u> 之八上比売之心、共行 <u>稲羽</u> 時、於大穴牟遲神負袋、為從者率往。	神代記	P74
稲羽	故、為如教、其身、如本也。此、 <u>稲羽</u> 之素菟者也。於今者謂菟神也。上所謂建豊波豆羅和氣王者、道守臣・忍海部造・御名部造・ <u>稲羽</u> 忍海部・丹波之竹野別・依網之阿毘古等之祖也。	神代記	P78
	故、是人、追尋其鶴、自木国到針間国、亦、追越 <u>稲羽</u> 国、即、到旦波国・多遲麻国、追廻東方、到近淡海国、乃越三野国、自尾張国伝以追科野国、遂追到高志国而、於和那美之水門張網、取其鳥而、持上獻。	開化天皇記 垂仁天皇記	P180 P204
稲城	爾、天皇詔之、吾、殆見欺乎、乃興軍擊沙本毘古王之時、其王、作 <u>稲城</u> 以待戰。	垂仁天皇記	P200
	此時、沙本毘売命、不得忍其兄、自後門逃出而、納其之 <u>稲城</u> 。		
	故、出其御子、置 <u>稲城</u> 外、令白天皇、若此御子矣、天皇之御子所思看者、可治賜。		
	爾、答白、今、当火烧 <u>稲城</u> 之時而、火中所生故、其御名、宜称本牟智和氣御子。	垂仁天皇記	P202

「稲種」は田に植える稲の種子である。『古事記』によれば、大気都比売神が殺され、その二つの目から稲種が生えたという。

「稲羽」とは山陰道の一国で因幡国である。現在、鳥取県東部にある。「イナバ」は稲葉、稲場であり、イネの置き場を指し、各地の地名にもみえる。『古事記』によると、稲羽之素菟が淤岐島から稲羽に渡ろうとして、ワニを並べてその背を渡ったが、ワニに毛皮を剥ぎ取られて泣いていたところを大国主神に助けられ

(5) 日野昭、「そがのいなめ 蘇我稲目」条、国史大辞典編集委員会、国史大辞典 第8巻、吉川弘文館、1987年、P617。

た。治った兎は「あなたの求婚は成功するでしょう」と宣託、あるいは言霊のような予祝を授ける。今では兎神とされる。

「稲城」は古代、家の周囲に稲を積み上げ、敵の矢や石を防ぐ防壁としたものである⁽⁶⁾。上代の民俗には、稲が悪魂や妖魔を防ぐ霊性があるものという信仰があり、一種の呪術方式として防敵の支度を構成し、敵軍に備えるものであった。

それらの研究から分かったのは、『古事記』から抽出する稲関連語彙の80%以上は、政治的活動あるいは人物と関連があり、濃厚な政治的色彩が現われている。これから、次の3章でそれぞれ「稲」と日本の祭祀活動、王権と関連する問題および日本古代国家、この3つの政治に関する問題を中心とし、研究を行うことにする。

3. 稲と祭祀

稲作農業を中心とした日本社会において、かつて百姓は稲を神様からの恵みと考えていた。そこから恵みを与えてくれる神様へのお礼の気持ちを表すために「祭祀」を行っている。

牧畜と農耕を基にする宗教文化の中で、人間がある霊性を共有する神と祖先にとって、人々の食用とする家畜と穀類を加工し、共に食べることは、神と人との間での生命霊性の交流になる。その上、このような場所にあつて、祭祀に最も適する神聖な食材は新しく生まれる家畜と収穫する稲に勝るものはない⁽⁷⁾。これ故、各種の祭祀の中で、稲に関するものが主要な位置に占めている。これらは大嘗祭や新嘗祭や祈年祭などである。その中でも、一番盛大で重要な祭祀は大嘗祭である。

(1) 穀物の神

「米粒1つには7人の神様がいます」と言われているように、日本の神道では米や稲、田それぞれを司る神様がおり、1年の初めと収穫の時期には彼らに豊作と収穫とを祈り感謝する祭祀が全国的に行なわれていた。

『古事記』の中で、稲と関連する神が多く出てくる。その内、「オオゲツヒメ」と

(6) 「いなぎ 稲城」条。松村明・三省堂編修所。大辞林。三省堂、1995年、第2版、P163。

(7) 刘岳兵。日本の宗教与历史思想—以神道为中心。天津人民出版社、2015年、第1版、P45。

「ウカノミタマ」と「大年神」3つの神はよく穀物の神と見なされる。

「オオゲツヒメ」については、『古事記』には須佐之男命が、高天の原を追放されてから、その後、出雲国へやって来るまでの間に、オオゲツヒメに食物を乞うエピソードが挿入されている。

又、食物乞大気都比売神。爾、大気都比売、自鼻・口及尻種々味物取出而、種々作具而進時、速須佐之男命、立伺其態、為穢汚而奉進、乃殺其大宜津比売神。故、所殺神於身生物者、於頭生蚕、於二日生稻種、於二耳生粟、於鼻生小豆、於陰生麦、於尻生大豆。故是、神産巢日御祖命、令取茲成種。⁽⁸⁾

また、名前の「オオ」は「多」の意味、「ゲ」は「ケ」の食物の意味である。このように、オオゲツヒメは穀物・食物・蚕の女神と見なされている。

「ウカノミタマ」は、『古事記』において、須佐之男が櫛名田比売の次に娶った神大市比売との間に生まれた。『日本書紀』の本文には登場せず、神産みの第六段の一書において、イザナギとイザナミが飢えて気力が無い時に産まれたとしている。そのため、「ウカノミタマ」は飢えに際した時、食を要することから穀物の神が生じたと考えられている。

神名の「ウカ」は穀物・食物の意味で、同じ意味の「ウケ」「ケ」を名前に持つ食物の女神トヨウケヒメとは同一視されてきた。平安時代の『延喜式』（大殿祭祀詞）ではトヨウケヒメについて、

是は、稲の霊なり。俗の詞に宇賀能美多麻といふ。

と説明している。「ミタマ」とは神秘的な生命力を意味する。産屋の戸口に稲束を置いたり、屋中で散米するなど、稲の霊には邪気を祓う神威があるとしている。このように、生命力を持つ食物や稲霊は女性的要素をもつと考えられている。

また、「ウカノミタマ」は伏見稻荷大社の主祭神であり、稻荷神として広く信仰されている。伊勢神宮ではそれより早くから、御倉神として祀られることから、この神は五穀の神である食物神の中でも、特に稲に関係の深い神だったとも考え

(8) 山口佳紀・神野志隆光校注・訳 新編日本古典文学全集1—古事記、小学館、1997年、第1版、P66、P68。

られている。

「大年神」は、須佐之男神と大山津見神の娘・神大市比売命との間の御子神で宇迦之御魂神の兄弟神である。

神名の「年」は、本来「穀物の実り」を意味したが、収穫には1年を要するところから、のちに「年」の意を生じるようになった語である。よって神名は、穀物の豊作をもたらす神の意である。また、大年神と香用比売の間の子に御年神、孫に若年神がおり、同様の神格の神とされる。

(2) 大嘗祭の起源

大嘗祭は稲作農業を中心とした日本社会に古くから伝承されてきた収穫儀礼に根ざしたものであり、天皇が即位した後、最初に挙行する大規模な新嘗祭のことである⁽⁹⁾。大嘗祭の時に、天皇が大嘗宮において、皇祖及び天神地祇に新穀を供え、自ら召し上がり、皇祖及び天神地祇に対し安寧と五穀豊穡などを感謝すると共に、国家・国民のために安寧と五穀豊穡などを祈念する儀式である。

大嘗祭の起源は『古事記』と『日本書紀』に遡ることができる。天孫降臨神話が、大嘗祭の縁起譚と思われる。皇孫は「天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命」と呼ばれ、「ホノニギ」は稲穂の豊作を表している。

記紀で、大嘗祭の起源を直接記録してはいないが、『日本書紀』神代紀の皇孫降臨という件には、天照大神が、

以吾高天原所御斎庭之穂、亦当御於吾兒。⁽¹⁰⁾

と勅した。これは斎庭の神勅で、大嘗祭とこの天孫降臨との関係を明らかにしたものである。大嘗の斎場に降下する稲の神の姿は聖なる斎庭の稲穂を手にし、降臨する天孫邇邇芸命そのものの姿に他ならない。

大嘗祭に奏する中臣の天神寿詞は、皇孫ホノニギが、この瑞穂の国を安らかに支配し、高御座にましまし、新嘗の祭の神饌をきこしめすように

(9) 岡田精司. 「だいじょうさい 大嘗祭」条. 国史大辞典編集委員会. 国史大辞典 第8巻. 吉川弘文館, 1987年, P769.

(10) 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳. 新編日本古典文学全集2—日本書紀1. 小学館, 1994年, 第1版, P138.

(上略) 天つ御膳の長御膳の遠御膳と、千秋の五百秋に、瑞穂を平けく安けく、由庭に所知食せと、事依さし奉りて、天降り坐しし後に(下略)⁽¹¹⁾

と宣る。皇祖カムロギ・カムロミの神勅を体现し、天降りされたことを記している。換言すれば、大嘗祭は天孫降臨により始まったと考えられている⁽¹²⁾。

(3) 天岩屋戸の神話と大嘗祭

『延喜式』では大嘗祭の儀式の施行細則が細かく記録されている。それを標準にし、記紀で描いた「天岩屋戸の神話」の場面を大嘗祭の儀式と比べれば、両者の間には類似している部分が多いことが分かる。筆者は表4のように整理した。

表4 天岩屋戸の神話と大嘗祭の儀式の比較

文献	同類項	記録	ページ
古事記 ⁽¹³⁾	大嘗之殿	因此言者、自我勝、云而、於勝佐備、離天照大御神之營田之阿、埋其溝、亦其於聞看大嘗之殿屎麻理散。	P62
日本書紀 ⁽¹⁴⁾	新宮	復見天照大神当新嘗時、則陰放屎於新宮。	P74
延喜式 ⁽¹⁵⁾	大嘗宮	凡造大嘗宮者。前祭七日。	P148
古事記	營田	因此言者、自我勝、云而、於勝佐備、離天照大御神之營田之阿、埋其溝、亦其於聞看大嘗之殿屎麻理散。	P62
日本書紀	御田	何則天照大神以天狹田・長田為御田。	P74
延喜式	營田	凡拔穂田者。國別六段。用百姓所營田。其代以正稅給之。	P144
古事記	忌服屋	天照大御神、坐忌服屋而、令織神御衣之時、穿其服屋之頂、逆剥天斑馬剥而、所墮入時、天服織女、見驚而、於梭衝陰上而死。	P62
日本書紀	斎服殿	又見天照大神方織神衣居斎服殿、則剥天斑駒、穿殿堯而投納。	P74
延喜式	織屋 神服殿	凡織神服者。……先祭織屋。然後始織。……其神服殿者、兩國各一字。	P146

(11) 黒板勝美. 新訂増補国史大系第26巻一弘仁式・延喜式・交替式. 吉川弘文館, 1937年。

(12) 日本文学研究資料刊行会編, 「古代王権と記紀神話」, 日本文学研究資料叢書—古事記・日本書紀I. 有精堂, 1976年, 3版, P47。

(13) 山口佳紀・神野志隆光校注・訳. 新編日本古典文学全集—古事記. 小学館, 1997年, 第1版。

(14) 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳. 新編日本古典文学全集2—日本書紀1. 小学館, 1994年, 第1版。

(15) 黒板勝美. 新訂増補国史大系第26巻一弘仁式・延喜式・交替式. 吉川弘文館, 1937年。

古事記	御衣	天照大御神、坐忌服屋而、令織神御衣之時、穿其服屋之頂、逆剥天斑馬剥而、所墮入時、天服織女、見驚而、於梭衝陰上而死。	P62
日本書紀	神衣	又見天照大神方織神衣居齋服殿、則剥天斑駒、穿殿莞而投納。	P74
延喜式	御服	御服庸布四段。	P143
	神服	凡織神服者。	P146
	齋服	凡齋服者。十一月中寅日給之。	P151
古事記	天宇受売者為衆	天宇受売命、手次繫天香山之天之日影而……何由以、天宇受売者為衆、亦、八百万神諸咲。	P64
日本書紀	巧作俳優	又媛女君遠祖天鈿女命、則手持茅纏之稍、立於天石窟戸之前、巧作俳優。	P76
延喜式	奏和舞 奏風俗樂 奏田舞	巳日辰二點御悠紀帳。三點薦御膳。次奏和舞。其召五位已上給饗。及六位已下參入奏風俗樂等。並同辰日。未二點御主基帳。供御膳之後奏田舞。庶事同前儀。事訖主基國賜祿。	P155

上の表から分かるように、新天皇が皇位継承に伴う大嘗祭の儀式は「天岩屋戸の神話」で描いた場面を忠実に反映している。

他方では、「酔而吐散登許曾」ということから、須佐之男命が酒に酔っていたことが推測できる。ここで、「稲」という語は直接的には記されないが、「米」は酒造りの原料であるため、「酒」は「稲」に関連する語と考えられる。なお「営田」や「大嘗」や「田舞」などの語の出現から、神代の時期においても、すでに耕作する稲田が存在し、そして神霊に穀物の豊作を感謝する大嘗祭が行われることが分かる。

4. 稲と王権

古代日本において、天皇は「政治と祭祀」とを一体としていた。つまり天皇は穀物の豊作を祭祀する最高の祭司だけではなく、国家の最高権力の代表でもあった。日本人にとって「稲」は生命の源でもあり、正統性と権威の象徴でもある。

(1) 稲と天皇

『古事記』上巻——天孫降臨の記事において、天照大御神は、天孫日子番能邇邇芸命に詔し、

此豊葦原水穗国者、汝将知国言依賜。故、隨命以可天降。⁽¹⁶⁾

と勅した。そして、天孫は父君に代わり、神勅により地上の聖山に降った。

皇孫ホノニギノミコトの名義は、本居宣長の説くように、「穂の丹饒君」であり、「丹とは穂の赤熟める」を云うのであろう。このミコトの正式の呼び名である天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命の名義は、「天地ににぎにぎしく実っている日の御子としての稲穂の神」という意味であろう⁽¹⁷⁾。

したがって、天皇は天孫の後代として稲穂が神格化し、稲霊が人の姿をし、この世に現れた「稲の王」であるといえる。

(2) 王権神授

天孫降臨の神話は『古事記』では以下のように記録されている。

是以、隨白之、科詔日子番能邇邇芸命、此豊葦原水穗国者、汝将知国言依賜。故、隨命以可天降。……爾、天兒屋命・布刀玉命・天宇受売命・伊斯許理度売命・玉祖命、并五伴緒矣支加而天降也。於是、副賜其遠岐斯八尺勾璫・鏡及草那芸劍、亦、常世思金神・手力男神・天石門別神而、詔者、此之鏡者、專為我御魂而、如拜吾前、伊都岐奉。次思金神者、取持前事為政。⁽¹⁸⁾

一方、『日本書紀』では、以下のように記録されている。

高皇產靈尊因勅曰、吾則起樹天津神籬及天津磐境、当為吾孫奉齋矣。汝天兒屋命・太玉命、宜持天津神籬降於葦原中国、亦為吾孫奉齋焉、乃使二神、陪從天忍穗耳尊以降之。

是時天照大神手持宝鏡、授天忍穗耳尊、而祝之曰、吾兒、視此宝鏡、当猶視

(16) 山口佳紀・神野志隆光校注・訳、新編日本古典文学全集1—古事記、小学館、1997年、第1版、P114。

(17) 日本文学研究資料刊行会編、「古代王権と記紀神話」、日本文学研究資料叢書—古事記・日本書紀I、有精堂、1976年、3版、P47。

(18) 山口佳紀・神野志隆光校注・訳、新編日本古典文学全集1—古事記、小学館、1997年、第1版、P114、P116。

吾。可与同床共殿、以為齋鏡。復勅天兒屋命・太玉命、惟爾二神亦同侍殿内、善為防護。又勅曰、以吾高天原所御齋庭之穗、亦當御於吾兒。⁽¹⁹⁾

天孫降臨の神話で、邇邇芸命は天照大御神の神勅により、豊葦原の水穂の国を受けられ、国土の象徴としての神聖な稲穂を手にし、高千穂の峯に降りた。『古事記』には齋庭の穂を受けられる神勅が記されていないが、豊葦原の水穂の国に受けられる神勅がある。豊葦原の水穂の国は穀物の豊穰の国という意味であるから、国あるいは齋庭の穂を受けられる神勅は同義である。

万世一系の天皇は日の御子として高天の原から豊葦原の水穂の国に降ったという信仰があることは、次の如き歌によっても知られる。それは『万葉集』巻2には、日並皇子尊の殯宮の時に、柿本朝臣人麻呂が作った歌がある。この歌の前半に神代以来の事を叙している。その中では、

(上略) 葦原の 瑞穂の国を 天地の 寄り合ひの極み 知らしめす 神の
尊と 天雲の 八重かき分けて 神下し いませまつりし 天照らす 日の
皇子は 飛ぶ鳥の 清御原の宮に 神ながら 太敷きまして 天皇の 敷き
ます国と 天の原 岩門を開き 神上り 上りいましぬ (下略)⁽²⁰⁾

と歌われている。古来、日本人は天皇の祖先が天神の神勅により、高天原から降臨したと考えてきた。天照大神は皇孫に齋庭の穂を受け、豊葦原の水穂の国を治めさせた。言い換えれば、天孫にこの土地の統治の権力、すなわち王権を授けたことによって、齋庭の穂は権力の象徴になるのである⁽²¹⁾。

天孫降臨の神話は皇統の神聖を確立すると共に、天皇の統治を安定たらしめるようになる。そして、この神話は後世の祈年祭などの祭祀において大王の稲種参与にまつわる聖なる由来、更に政治的支配の支柱になる。

(19) 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳、新編日本古典文学全集2—日本書紀1、小学館、1994年、第1版、P136、P138。

(20) 小島憲之・木下正俊校注・訳、新編日本古典文学全集6—万葉集、小学館、1994年、第1版、P118-119。

(21) 武田祐吉、「第十 本辞の祭祀性(二)」、古事記説話群の研究、明治書院、1956年、再版、P298-299。

(3) 王権の呪術と継承

第3章では、大嘗祭と「天岩屋戸の神話」で描いた場面とを比較した。本節においては、大嘗祭と王権の呪術・継承の間の関係について論じたい。

「即位儀式」と同じように、皇室の長い伝統を受け継ぎ、大嘗祭は天皇が皇位を継承する際に挙行しなければならない一世に一度の重要な儀式である。

大嘗祭は「収穫祭」と「神権継承儀式」との2つの部分からなっている。

「収穫祭」とは、天皇がその年の新穀、またこれにより作られる食物と酒を親しく神に捧げ、天皇自身も共に食し、天神に感謝する気持ちを表わす祭儀である。そして、穀物の豊作と万民が安らかに生を享けられることを祈る。この祭祀は皇孫邇邇芸命が斎庭の穂を手にし、高天原から豊葦原の水穂の国に降ったという神話の追憶と継続である。これも天皇を稲霊とした呪術である。

もう1つは神権継承儀式、即ち天皇が天照大御神の子、稲霊として再生する儀式である。本祭の晩に天皇は潔斎し、斎服を着け、深夜、悠紀殿に入る。悠紀殿で天皇は布団と坂枕が敷いてある神座に臥し、天神から稲霊としての神権を受けられ、継承し、霊力と霊威を保持し続けることができるようになる。これにより、天皇としての資格を新たに身に付ける。

大嘗祭とは天皇が稲霊としての霊力を再生し、この国家に豊作をもたらす不可欠な呪術的儀式という役割だけでなく、天皇が「現人神」の身分を取り、国民に承認されるために欠かせない祭祀である。このような儀式は天皇の身分を衆生と神の交流者と農養生産の支配者と設定することを目指し、それにより、天皇が政治の権威から宗教の権威と昇華、移行することを実現する。このように長期にわたり、大嘗祭は神権と王権を完璧に結合し、単純祭祀活動から皇室のために奉仕する政治的活動になる。

そこで、天皇は稲霊の化身になり、「稲」と天皇と神が「三位一体」になることができる。古代、人々は神霊にきわめて高い畏敬の気持ちを持っていたため、自然と人々が「現人神」として天皇に同様に畏敬し、一生天皇に忠誠を尽くす。これが日本民族の忠君精神を支える1つの基礎になると思われる。

5. 稲と古代国家

国は人民を中心とし、人にとって食糧は何よりも重要である。食糧は人間が生

存する上で、基本的な需要を持つ。食糧の問題は人の命の存続に関するだけではなく、同時に国家の政治、発展および社会の安定に影響する。そのため、食糧の問題は経済問題ばかりでなく、政治問題でもある。

(1) 国名

「豊葦原之千秋長五百秋之水穗国」は古代日本国の美称で、「豊葦原水穗国」と「葦原中国」はその略称である。『古事記』の「葦原……国」という国名は表5のように3種に総括することができる。

表5 『古事記』における「葦原……国」という国名の統計

国名	キーセンテンス	ページ
豊葦原之千秋長五百秋之水穗国	天照大御神之命以、 <u>豊葦原之千秋長五百秋之水穗国</u> 者、我御子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命之所知国、言因賜而、天降也。	P98
	於是、天忍穗耳命、於天浮橋多多志而、詔之、 <u>豊葦原之千秋長五百秋之水穗国</u> 者、伊多久佐夜芸弓有那理、告而、更還上、請于天照大神。	
豊葦原水穗国	是以、隨白之、科詔日子番能邇邇芸命、此 <u>豊葦原水穗国</u> 者、汝将知国言依賜。	P114
葦原中国	爾、伊耶那岐命、告桃子、汝、如助吾、於 <u>葦原中国</u> 所有、宇都志伎青人草之、落苦瀬而患惚時、可助。	P48
	爾、高天原皆暗、 <u>葦原中国</u> 悉闇、因此而常夜往。	P62
	於是、天照大御神、以為怪、細開天石屋戸而、内告者、因吾隱坐而、以為天原自闇、亦 <u>葦原中国</u> 皆闇矣、何由以、天宇受売者為樂、亦、八百万神諸咲。	P66
	故、天照大御神出坐之時、高天原及 <u>葦原中国</u> 、自得照明。	P66
	爾、高御產巢日神・天照大御神之命以、於天安河之河原神集八百万神集而、思金神令思而、詔、此 <u>葦原中国</u> 者、我御子之所知国、言依所賜之國也。	P98
	是以、高御產巢日神・天照大御神、亦、問諸神等、所遣 <u>葦原中国</u> 之天菩比神、久不復奏。亦、使何神之、吉。	P100
	於是、諸神及思金神、答白、可遣雉、名鳴女時、詔之、汝、行、問天若日子狀者、汝所以使 <u>葦原中国</u> 者、言趣和其国之荒振神等之者也。何至于八年不復奏。	
	汝之宇志波祁流 <u>葦原中国</u> 者、我御子之所知国言依賜。	P108
	不違八重事代主神之言。此 <u>葦原中国</u> 者、隨天神御子之命獻。	P110
	此 <u>葦原中国</u> 者、隨命既獻也。	
	故、建御雷神、返參上、復奏言向和平 <u>葦原中国</u> 之狀。	P112
	爾、天照大御神・高木神之命以、詔太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命、今、平訖 <u>葦原中国</u> 之白。	P112
	爾、日子番能邇邇芸命將天降之時、居天之八衢而、上光高天原、下光 <u>葦原中国</u> 之神、於是有。	P114
	故、天神御子、問獲其橫刀之所由、高倉下答曰、已夢之、天照大神・高木神二柱神之命以、召建御雷神而詔、 <u>葦原中国</u> 者、伊多玖佐夜芸帝阿理那理。我御子等、不平坐良志。其 <u>葦原中国</u> 者、專汝所言向之國。	P146

上の表を統計すると、『古事記』の中で、「葦原中国」は延べ7回、「豊葦原之千秋長五百秋之水穂国」は延べ2回、「豊葦原水穂国」は1回しか現れていない。上の表から分かるように、『古事記』の神代記における伊耶那岐命が桃の実に

爾、伊耶那岐命、告桃子、汝、如助吾、於葦原中国所有、宇都志伎青人草之、落苦瀬而患惚時、可助。⁽²²⁾

と言った。ここから「葦原中国」という名称が初めて現われる。また、天照大御神の神勅でこの名称がよく見える。

「豊葦原之千秋長五百秋之水穂国」は古代日本国の美称である。「秋」は、一方では五穀や果実などを豊作する季節で、他方では日本の大部分は温帯海洋性気候に属し、古代に多くの穀物が1年中、秋に1回だけ成熟できる。「秋」は一成熟あるいは一耕作にかかる時間の計量単位となり、1年の時間を比喩するようになる。「千」と「五百」は多数を指し、時間を表す語の前に冠すれば、時間の長さを形容するようになる。そのため、「千秋長五百秋」とは百年千年、いつまでも、という意味に当たる。また、「水穂」の「水」という字は『日本書紀』ではしばしば「瑞」という字で記され、瑞気、瑞祥、瑞兆などの用法のようにめでたいしるし、吉兆である。穂とは、稲や麦、芒などの長い花軸の先に花や実が密集して付いたものである⁽²³⁾。「千秋長五百秋之水穂国」の前に「豊葦原」この地名を冠し、「豊葦原千秋長五百秋之水穂国」の意味は豊葦原この地で百年千年にわたり、いつまでもめでたい稲を主とする穀物が豊作できる国である。

上述したように、天照大御神はこの美称を賜り、この国名に天照大御神とも古代日本人とも、国家の発展に対する好ましい情感や希望を託した。

(2) ミヤケ (屯倉)

ミヤケの「ミ」は敬語で、「ヤ」も「ケ」も「家」という字で表すことができる。そのため、屯倉とは「御宅 (みやけ)」、「宮家 (みやけ)」という意味で、もともとは大和朝廷の建物を指し、後に大和朝廷の直轄地で収穫された稲を収める倉庫を指

(22) 山口佳紀・神野志隆光校注・訳、新編日本古典文学全集1—古事記、小学館、1997年、第1版、P48。

(23) 「ほ 穂」条、松村明・三省堂編修所、大辞林、三省堂、1995年、第2版、P2342。

すことになる。

「ミヤケ」は『古事記』では「屯家」と「三宅」とも表記されている。

表6 『古事記』に記載されている「ミヤケ」

屯倉	キーセンテンス	記	ページ
倭屯家	此之御世、定田部、又、定東之淡水門、又、定膳之大伴部、又、定倭屯家。	景行 天皇記	P216
淡道屯家	是以知、坐腹中定国也。此之御世、定淡道之屯家也。	仲哀 天皇記	P242
渡屯家 (百濟)	故、是以新羅国者、定御馬甘、百濟国者、定渡屯家。	仲哀 天皇記	P246
茨田三宅	又、役秦人、作茨田堤及茨田三宅、又、作丸邇池・依網池……又、定墨江之津。	仁德 天皇記	P286

中央集権制度の発展に従って、大和朝廷が様々な目的で、屯倉は全国に設置した経済と軍事を一体化する拠点になる。

一方、経済的方面では、倭屯家と茨田三宅は大規模な水田開発事業ために設けられたことが分かる。『古事記』『仁徳天皇記』の

又、役秦人、作茨田堤及茨田三宅⁽²⁴⁾

から分かるように、渡来人が日本に最先端の技術をもたらし、水田事業の開発に大きく役立ってきた。そのおかげで、古代日本の農業生産力は飛躍的に高まっていった⁽²⁵⁾。

その他、仲哀期に置かれた淡道屯家は田地だけでなく、大王の狩猟場でもあった。また、この地域の漁民や山民は直属の民として、狩猟してきた獲物や海産物を王室に納めた。

ほかには、屯倉は古代の貢納制度と密接な関係がある。律令制度における稲は中央への主要な貢納物（租と調と諸国貢献物を含める）として、屯倉で蓄積されていた。

(24) 山口佳紀・神野志隆光校注・訳. 新編日本古典文学全集 1—古事記. 小学館, 1997年, 第1版, P286。

(25) 王凱. “瑞雪兆丰年”与中国农耕文化在日本的传播问题. 古代文明, 2015年02期, P105。

管理の方法に着目すると、屯倉は地方豪族管理型屯倉と中央官人管理型屯倉に分けることができる⁽²⁶⁾。

6世紀に入ると、地方豪族は服従の証として、屯倉を朝廷に献じていくことが多くなった。特に糟屋の屯倉のように、贖罪として屯倉が献上されている。『日本書紀』継体天皇21年(527)条で、糟屋の屯倉に関する磐井之乱について以下のように記録されている。

二十一年夏六月壬辰朔甲午、近江毛野臣率衆六万欲往任那、為復興建新羅所破南加羅・喙已吞、合任那。於是筑紫國造磐井陰謀叛逆、猶預經年、恐事難成、恒伺間隙。(中略)

二十二年冬十一月甲寅朔甲子、大將軍物部大連麿鹿火、親与賊帥磐井交戦於筑紫御井郡。旗鼓相望、埃塵相接。決機兩陣之間、不避万死之地。遂斬磐井、果定疆場。十二月、筑紫君葛子恐坐父誅、献糟屋屯倉、求贖死罪。⁽²⁷⁾

磐井之乱が物部氏に平定された後、磐井の子の葛子は父の罪に連坐し、殺される事を恐れ、糟屋の屯倉を献上したことを通じ、中央に臣下として仕える衷心を現した。それによって、彼は免罪された。

磐井の乱の翌年、大和朝廷は九州の支配力を強めるため、武力により各要所に屯倉を設置した。このような地方の屯倉は、大和朝廷の武力行使によって設置され、他は大和朝廷の要請に応じ、地方が屯倉を献上したこともあった。それから、中央から専門的官人を派遣し、この屯倉の管理に当らせる。このように、地方豪族管理型屯倉が中央官人管理型屯倉に変わってきた。

上述したように、大豪族の領地で屯倉が集散的に置かれることにより、地方への監視を強化し、地方安定を確保できるだけでなく、さらに中央集権化への障害も排除できる。また、屯倉は稲穀を納める官の倉として、その経済と軍事の方面での二重の重要性があるため、朝廷に屯倉を献じる行為はすでに服従儀礼の1つとなる。

(26) 直木孝次郎、古代税制と屯倉、人文研究 20 (9)、1968、P731-P732。

(27) 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳、新編日本古典文学全集 2—日本書紀 2、小学館、1996年、第1版、P308、P310、P312。

6. 終わりに

小論は『古事記』の「稲」を研究対象にしたものである。

「はじめに」では、先行研究や研究の独創性などについて論じた。第2章では、『古事記』をテキストとして、その中で「稲」についての関連語彙を検索し、分析を1つずつ行った。第3章では、『古事記』の中で穀物の神と見なされている3つの神を研究しつつ、最も代表的な大嘗祭を手がかりに、天孫降臨神話と大嘗祭の関係に触れながら、「天岩屋戸の神話」で描いた場面が新天皇が皇位継承に伴う大嘗祭の儀式を忠実に反映していることについて論じた。第4章では、「稲」と王権を中心とし、大嘗祭と王権の呪術・継承との関係、および「稲」は王権の象徴であることについて論じた。第5章では、「稲」と緊密な関係を持つ古代日本国の美称と「屯倉」について論じた。

全編を通じて論じてきたように、「稲」は重要な祭祀品、王権の象徴だけでなく、更には、経済と軍事の要でもある。日本人は稲を神化し、神の色彩を与える。神霊の祭祀、神聖な王権、そして古代国家、これらの政治と関係がある活動はすべて「稲」と密接な関係にある。日本において、「稲」が重要な経済作物として存在すると同時に、日本の祭祀活動、王権、更には古代国家の発展と緊密な関係があり、政治性の象徴でもある。「稲」と政治がしっかり結び付けられ、このような緊密な関係は日本農耕社会の発展に従い、絶えずに強化させられ、その政治性の色彩は日々濃厚になり、名実ともに「政治的稲」となってゆく。そして、その濃厚な政治的色彩が『古事記』においてよく表われているものである。

今後、小論を土台に、日本古代文献における「稲」をはじめとする農作物を対象に、更に研究の幅を広げ、日本における農耕の文化と歴史により広く、深く研究して行きたいと考える。

参考文献

<専門書>

- [1] 刘立善. 没有经卷的宗教：日本神道. 宁夏人民出版社, 2005年, 第1版。
- [2] 王金陵. 日本人的原始信仰. 宁夏人民出版社, 2005年, 第2版。
- [3] 王金陵. 日本神道研究. 上海辞书出版社, 2007年, 第1版。
- [4] 刘岳兵. 日本的宗教与历史思想—以神道为中心. 天津人民出版社, 2015年, 第1版。
- [5] 武田祐吉. 古事記説話群の研究. 明治書院, 1956年, 再版。
- [6] 松村武雄. 日本神話の研究 第4巻 総合研究編. 明治書院, 1958年, 初版。

- [7] 三品彰英. 日本書紀研究 第1冊. 塙書房, 1964年。
- [8] 松本信弘. 日本の神話. 至文堂, 1966年。
- [9] 三品彰英. 日本書紀研究 第2冊. 塙書房, 1968年, 第2版。
- [10] 三品彰英. 日本書紀研究 第4冊. 塙書房, 1970年。
- [11] 三品彰英. 建国神話の諸問題. 平凡社, 1971年, 初版。
- [12] 日本文学研究資料刊行会編. 日本文学研究資料叢書—古事記・日本書紀I. 有精堂, 1976年, 3版。
- [13] 日本文学研究資料刊行会編. 日本文学研究資料叢書—古事記・日本書紀II. 有精堂, 1980年, 再版。

<論文>

- [1] 王秀文. “大尝祭”的文化背景及其含义. 日本问题, 1990年03期, P87-P94。
- [2] 李红·秦礼君. 日本天皇即位仪式“大尝祭”的历史演变与社会分析. 南京农业大学学报, 2006年03期, P93-96。
- [3] 陈秀武. 记纪神话中的日本政治意识初探. 日本学刊, 2007年01期, P100-P111、P159。
- [4] 张慧荣. 中日稻作农耕文化地名的比较研究. 农业考古, 2008年03期, P124-P128。
- [5] 王凯. 日本古代大陆移民文学与古代王权—以难波津之歌为中心. 日语学习与研究, 2010年05期, P117-P123。
- [6] 陈馨. 古代日本人稻信仰探究—以《风土记》为中心. 烟台大学学报(哲学社会科学版), 2013年01期, P74-P79。
- [7] 王凯. 『万葉集』と日本古代大陸移民:「東亜交往民」の概念提起について. 國學院雜誌 116(1), 2015-01, P188-P210。
- [8] 王凯. “瑞雪兆丰年”与中国农耕文化在日本的传播问题. 古代文明, 2015年02期, P105-P111。
- [9] 松本彦次郎. 屯倉について(大化革新以前の土地制). 三田学会雑誌 8(4), 1914-05, P494(114)-P504(124)。
- [10] 直木孝次郎. 古代税制と屯倉. 人文研究 20(9), 1968, P731-P747。
- [11] 都倉義孝. 古代王権の国土とその継承(1)—『古事記』の構造に関連して—, 早稲田商学(286), 1980-12, P601-P622。
- [12] 都倉義孝. 古代王権の国土とその継承(2)—『古事記』の構造に関連して—, 早稲田商学(292), 1981-12, P600-P620。
- [13] 池添博彦. 食物文化考:古事記神話と稲作文化. 帯広大谷短期大学紀要 25, 1988-03, P27-P37。
- [14] 池添 博彦. 食物文化考:日本書紀神話と稲作文化. 帯広大谷短期大学紀要 26, 1989-03, P21-P31。
- [15] 池添 博彦・松浦 美由紀. 古事記の食物文化考. 帯広大谷短期大学紀要 29, 1992-03, P43-P54。
- [16] 平田兼一. 稲の王:天皇即位儀礼に於ける水平的表象と垂直的表象. 日本文學誌要 51, 1995-03, P37-P46。
- [17] 松本直樹. 『古事記』の穀物起源神話について—『古事記』的展開の国作りへ. 国文学研究 116, 1995-06, P1-P11。

- [18] 池添博彦. 日本書紀の食文化考. 帯広大谷短期大学紀要 33, 1996-03, P35-P48。
- [19] 菅野雅雄. 「五穀の起源」物語の位置—『古事記』上巻の構成の研究. 中京国文学 (20), 2001, P1-P11。
- [20] 北野達・キタノサトシ・Kitano Satoshi. 『古事記』天孫降臨神話の形成—伊勢神宮の創始と大嘗祭と—, 山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告 (40), 2013-03, P1-P35。